

2 1 章 34 節 イサクの誕生 ハガルとイシュマエル・アビメレクとの契約
 2 2 章 24 節 アブラハムイサクをささげる ナホルの子孫
 2 3 章 20 節 サラの死と埋葬
 2 4 章 66 節 イサクとリベカの結婚
 2 5 章 34 節 ケトラによるアブラハムの子孫 アブラハムの死と埋葬
 イシュマエルの子孫・エソウとヤコブの誕生・長子の特権

2 6 章 35 節 イサクのゲラルの滞在 井戸をめぐる争い
 イサクとアビメレクの契約・エソウの妻



2 7 章 46 節 リベカの計略 祝福をだまし取るヤコブ・悔しがるエソウ
 逃亡の勧め

2 8 章 22 節 ヤコブの出発 エソウの別の妻 ヤコブの夢

2 9 章 35 節 ラバンの家の家に着く ヤコブの結婚・ヤコブの子供

3 0 章 43 節 ラバンとの賭け引き・ヤコブの工夫



創世記

第二十三章 第二十五章

第二十一章 イサアの誕生

主は約束されたとおりにサラを顧みさまいに
語りれたとおりにサラのために行なわれたので
彼女は身ごもり年老いたアブラハムとの間に
男の子を産んだそれは神が約束されていた
時期であつたアブラハムはサラが産んだ自分の子を
イサクと名付け神が命じられたとおりに毎日
息子イサクに割礼を施した息子イサクが

生まれたときアブラハムは百歳であった

サラは言った「神はわたしに笑いをとお与えに
なつた。聞く者は皆わたしと笑いついささ世に
とくれ多でししう」サラはまた言った「誰が

アブラハムに言いえたがししうサラは子に乳を合ませる
だろとしかわたしは子を産みませんでした
今老いた

夫のために「おが子子供は育つて乳離れした

アブラハムは多々の乳離れの日に盛大な祝宴を

開いた

ハガルとイシメマエル

サラはエジプトの女ハガルがアブラハムとの間に産んだ
子がイサクをからかつていぢのを見てアブラハムに訴えた
「あの女とあの子を同じにキーてゐたぢやあゝ女の間に
わだちの子とイサクと同じ跡継ぎとならば」
おりかせん」
「は」とはアブラハムも非難をにやめた
その子の自らの子とあつたからである
神は
アブラハムに言われた「あの子とあゝ女の間に産んだ

苦い水でも飲んでみるからと、ぐんぐんお水を飲むことに
従うが、いあなたの子孫はイサクにように伝えられる
—が—あの女の息子と—この国民の父とすま彼も
あなたの子であらうから、だ「アブラハムは次の朝早く起き
べい」と木の革袋を取ってハガルに子え背中に負わせて
子供を連れ去らせ、たハガルは立ち去る「アハハハハ」
の荒野を歩いた。革袋の水が無くなること
娘は子供を—木の灌木の木の下に寝かせ

わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びないと言つて
矢の届くほど離れ子供の方を向いて座り込んだ
彼女は子供の方を向いて座ると声をあげて泣いた
神は子供の泣き声も聞かれ天から神の御使が
ハガルに呼びかけて言ったハガルよどうしたのか
恐れろことはなぬ神はあきこにいろ子供の泣き声も
聞かれたまうそ行そあの子を抱き上げお前の腕で
しから抱き締めやいなさいわたしはあの子を

大きな国民とする 神がハガルの目を開かれたので
彼女は水のある井戸を見つけた 彼女は行って
草袋に水を満たし 子供に飲ませた

神がその子と共におられたので その子は成長し
荒野に歩いて弓を射る者となった 彼がハラゴの
荒野に住んでいたとき 母は彼のために 草袋に水を
の国から迎えた

アビメレクとの契約

そのころアビメレフとその軍隊の長官は
はアブラハムに言った神はあなたが何を
なさいともあなたと共にあります

どうか今どうぞわたしの子わたしの孫を

歎かなむと神にかけて誓えよと云はくたさい

わたしがあなたがたに友好的な態度を

とったようにあなたも寄り留めてこの国を

わたしに友好的な態度をとってください

「アブラムは答へた、「よろし、誓ひます。」
アブラムはアビメレウの部下たちが井戸を奪った
ことに、「アビメレウを責めたアビメレウは言った
「そんなことをした者がいたとは知りませんでした
あなたもおお喜びにならなかつた。わたしは今日まで
聞いていなかったのです。」アブラムは羊と牛の群れ
を連れて来てアビメレウに贈り、二人は契約を結んだ。
アブラムは更に羊の群れの中から七匹(シスバ)の雌の

小卒を別にいたのでアダムスがアブラムに尋ねた
「このカ国の権の小卒を別にいたのは何のたがですか」
アブラムは答えた「わたしの手があるカ国の権の
小卒を受け取ってわたしがこの井戸(ベエル)を掘った
ことの証拠として」そこでこの場所を
ベエル・シエバと呼ぶようになった三人がそこで誓いを
交わしたがからなであら三人はベエル・シエバで
契約を結びアダムスとその軍隊の長ピロスは

第二十一章 アブラムイサクをよびける

これらのことの後で神はアブラムを試しよめた神が
アブラムよと呼びかけ彼がはいと答えると

神は命づられたあなたの子あなたを愛する
独り子イサクを連れてモリヤの地にいきなさい

わたしが命づる山の一つに登り彼を焼き尽くす

献げ物と一アサ子げなきい 次の朝早くアブラムは

ろばに鞍を置き献げ物に用いる薪を割り込の

若者と息子をみづを連れ神の命じられた所に
向う行った三日目になつてアブラムが目を見すと
遠くにその場所が見えたのでアブラムは若者に
言ふた「お前たちはろばと一諸にこゝで侍りなさい
わたしは息子とあまきこに行つて礼拝をせよ」
また戻つて来るアブラムは焼きたるす獻げ物用にと
薪を取つて息子に背負わせ自分は火と刃物を
手に持った。人は一諸に歩いて行つた。

イサアは又アブラハムに「おたーのお父さん」と呼びかけた
彼が「いかにいかにおたーの子よ」と答えるよイサアは
言った「火と薪はここにありませぬ、焼き尽す献げ
ものにするよ、羊はどこにいますか？」アブラハムは答えた
「おたーの子よ、焼き尽す献げ物の羊はまじつと
神が備えてくださるよ」「二人は一語に歩いて行った
神が命じられた場所に着くとアブラハムはそこに
祭壇を築き、薪を並べ、自己イサアを縛って

祭壇の薪の上に載せた。そらしてアブラムは手を
伸して刃物もとり息子を屠うとした。

そのとき天からまの御使が「アブラムアブラム」と
呼びかけた。彼が「はい」と答へると御使は言った。
「その子に手を下すな。何もいふならな。あなたが
神を畏れる者であるが。今分かった。からだ。」

あなたは自分の独り子である。息子を屠う。わたしに
おそれな。アブラムは目を凝

うらへ見回した。すもも。後の木の茂みに一匹の雄羊
が筒をとりつけていた。アブラムは行つてその雄羊も
捕まへ息子の代りに焼き尽くす。献げ物として
ささげた。アブラムはその場祈をもやらせ。イルエ(まは
偉えてくださること名付けた。そこで人は今日でも

「まの山に偉えあり(まま)」と言つて。このまの御使は

再び天からアブラムに呼びかけた。御使は言った。

「わたしは自らにかけア哲言り。まは言はわれる。

あなたがこのまゝを行い、自分の独り子であり、息子すら
惜しまなかつたので、あなたを豊かに祝福し、あなた
の子孫を天の星のあうりに、海辺の砂のよろりに増やそう
あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る地上の諸国
はすべてあなたの子孫にまうて祝福を受けら
あなたがわたしの声に聞き従ったからである
アダムは若者のいるところに戻り、共にベエル・シバへ
向つた。アブラハムはベエル・シバに住んだ。

ナホルの子孫

これらのことの後でアブラハムに知らせが届いた

ミルカもまたあなたとの兄弟ナホルとの間に子供を

産みまゝに長男はウツその弟はブズ次はアラムの

父ケムエルそれからケセトハズビルダシエイトラフベトエルです

ベトエルはリベカ之父となったミルカはアブラハムの兄弟

ナホルとの間にこれらの八人の子供を産んだナホルの

御女でシウマとらり女はもまたテバガムスシエマアカ

を産んだ

第二十三 早サラの死と埋葬

サラの生涯は百二十七年であつた。これがサラの
生きた年数である。②サラはカナダ地方のキルヤトアルバ
すがわちへブロンで死んだ。アブラムはサラのため、胸を
打ち嘆き悲しんだ。③アブラムは遺体の傍らから
立ちあがり、トの人々に頼んだ。④わたりはあなた
がたのところに一時滞在すまう寄留者ですが、
あなたがたの所有する基地を譲つてくれたら、
ませんがよくなつた妻を葬つてやりたいのです。

へトの人々はアブラハムに答えたことだろうか

(2)

御主人お聞きください。あなたがわたしの
中で神に選ばれた方です。どうぞわたしの
最もよい基地を選んで置くなられた方を葬らうと
くださいます。わたしどもの中には基地の提供を
拒んで置くなられた方を葬らせない者など一人も
いません。アブラハムは国の民であるへトの人々に
挨拶をして頼んだらもういなくなりました。葬らうと

葬することをお許しただけならせむ

③

わたしの願いを聞いてくださいますか

エフロンにお願ひしてこのあの方の畑の端に

あらまらべラの洞穴を譲っていただきたいのです

十分な銀をお払いしますから皆様方の

間に基地を所有させてください

エフロンは

その時トの人々の間に産み出されたトの人

エフロンは町の内の市場に集まるとすぶるの

トの人々が聞いて「さういふらうでアブラハムに答えた
らうか」といふ主人がお聞きください。あの畑は差し
上げます。あそこにある洞穴も差し上げます。
わたしの一族が立ち会っているところであな
たに差し上げますから早速とくなれた方も
羨ましくありません。アブラハムは国の民の前で挨拶
をし、国の民の聞いていた所でエロンに頼んだ
「わたしの願いを聞き入れてください。さうなら

どうか畑の代金を私あせてくださいさうすれば
さくたうた妻をもあそびに葬らうとやります

エフロンはアブラハムに告げたさうか御主人お聞
きくださいあの土地は銀四百シケルのものです

それがあなたとあたりの間事とどお程のことでしょう

早速さくたうた方を葬らうとさうかアブラハムは
ハの言を聞き入れエフロンがトの人々が

聞かしてさうとさうかアブラハムは銀四百シケルを

商人の通用銀の重さで量りエフロシに渡した
こうしてアデベテにあるエフロシの畑は土地とその
洞穴とその周囲の境界内に生えている木を
含め所のの広場に集めていたすべての人の
立ち会いのもとにアブラハムの所有となった。その後
アブラハムはカナ地方のヘbronにあるマクソの畑の
アデベテの畑の洞穴に妻サラをも葬った。その畑と
その洞穴はこうしてトの人からアブラハムが買い
取り基地として所有することになった。

第二十四章——イサクとリベカの結婚

アブラムは多くの目をも重ねね老人にならまは
何事に置いてもアブラムに祝福をお与え

にならていた。(2) アブラムは家の全財産を任せて

いる會寄の僕に言ふた、手をわたしの腿の
間に入れ、天の神地の神であるまにかけし

誓いなさい、あなたはわたしの息子の嫁を

わたしが今住んでゐるカナンの娘から取るぞ

はたらく

わたしの一族のいる故郷一行で嫁を息子
イサウのために連れて来らうとした。僕は尋ねた
「もーかすろとその娘がわたしに従ってこの土地
へ来たくな」と言わなかった。その場合には
御子息をあなた達の故郷にお連れしてよ
うでしょう。アブスムは答えた。決して息子
をあなた一行がせてはならない。天の神である
まはわたしの父の家生まれ故郷から連れ

出しあなたの子孫にこの土地をゆえに「*inherit*」
わたしに誓い約束してくださいましたそのなが
お前の行く手に御使いを遣わして「*where*」

息子に嫁を連れて来るのがで「*bring*」
くだら「*bring*」もし女がお前に従う「*follow*」
たくな「*bring*」ならば「*bring*」お前は「*bring*」
「*bring*」

この誓いを解かれる「*bring*」あなた「*bring*」
あちらに行か「*bring*」ただ「*bring*」は「*bring*」なら「*bring*」

そこで僕は主人アブラムの腿の間に手を入れ

そのことを彼に告げられた。僕は主人のらくだの中
から十頭を選び主人から預った高価な贈り物を

多く携えアラム・ナハライムのナホルの町に向かそ去った。
女たちが水くみに来るア方彼はらくだを町外れ

の井戸の傍らに休ませア祈った。主人アブラムの
神さまよどうか今日わたしを顧みよ主人アブラムに

恵みをもよほさうとお願いした。わたしは今御覽のまゝに

泉の傍に立ちまわすこの舟に宿む人の娘たちが
水もくみた来たときこそその一人にどうかが水がめをも
傾けて飲ませてくださいと頼んでみますその娘が
「どうぞお飲みくださいさうだにも飲ませてもら
ましよう」と答へれば彼女こそあなたがあなたの
僕イサラの娘としてお決めになつたかおんねいんだ
さうそのいとにようアあなたはあなたがお人に
しよもにまわられたのを知りてしよら」

僕がまだ祈り終わらないうちに、見よりルカが水が
肩に載せてやうて来た。彼女はアゲラム公の兄弟
ナホルとその妻ミルカの息子、子ベトエルの娘で、際まで
美しく、男を知らぬ、処女であつた。彼女が自水に
下りて行き、水がめに水を満たして上がつて来ると
僕は駆け寄り、彼女に向かい合つて語りかけた。
「水がめの水を少し飲ませてくださいますか？」と
彼女は「どうぞお飲みください」と答へると、すぐに

すべに水がめをと下ろして手に抱え彼に飲ませた
彼が飲み終わると彼女はいらんだにも水を
くんで来てたつぶり飲ませてもらおう。」
と言いつながらすべにかめの水と水桶に掛け
また水をもくみに井戸に走って行った。この間
彼女はすべへのらくだに水をもくんでやった。
その間僕はまがこの旅の目的をかなえてくだ
さうかどうかを知ろうとして黙つて彼女を
見つめていた。

らくだが水を飲み終わると彼はまた「お金の
の鼻輪一つと十ニケルの金の腕輪二つを取り出した
からあなたはどうだの娘さんですか教えてくださ
りませんか」お父さんの家にはおたーともが泊めていただけ
場所があるでしうか」と尋ねた。すると彼女は
「おたーはオーストリアの子（トエルの娘
です」と答へて更に続け「おたーともは所
にはありませんが、おたーともは泊まらな
い場所もありません」と言った。

彼はひげをまげずいてまをも伏し拝みま主人アブラハムの
神まはただたえられますよようにまの慈しみと

まことはわたりの主人を離れずまはわたりの
旅路をまきま人の一族の家にたどりつがせて
くださいま」と祈った娘は走り行き

母の家の者に出来事を告げた。リベカには
ラベンという兄がいたがラバンはすぐに町の外れ
の泉の傍らに立ちその人のところへ走った。

妹が着けてゐる鼻輪と腕輪を見妹はうかが

「その人がいつか来た」と話してゐるのを聞いた
ためでもあつて彼が行きみまると確かに泉のほう
のらくだのそばにその人が立ちこめていたそこで

ズンと言つたおいでくださいましたに祝福された
お方なぞ町の外に立つておられるのですか

わたしがお泊りになる部屋しらくだの休む
場所も整えました その人は家にしらくだの

鞍もはずしたらくだにはわらと餌が与えられ
その人と従者たちには足を洗う水が運ばれた
やがて食事が前に並べられたがその人は言った
「用件をお話すらわぐては食事もいただくわけ
にはまじりません」お話をくださいとズンが答え
るとその人は語り始めた。「わたしはアブス公の
僕でございます。さすがわたしの主人を大層祝福
され羊や牛の群れ金銀男女の奴隷らとくだや

ろばなどをおとすおちえにならうたので主人は裕福
になうかうた奥様のサテは年をとってか
たのにおたの主人との間に男の子をまみ
まうたそのおたの主人は金財産をお
譲りにならうたので主人はおたの誓言をま
てさせあなたはおたの息子の嫁をおたが
今住んでいるカサシの土地の娘から送び取るな
わたしの父の家わたしの親族のところへ行つて

息子の嫁を連れて来らうに命が下つた
わたしが主人に「おれが女がわたしに
従つて来たくはないと言ふかも知れやせん」と申し
おまよと主人は「わたしは今おまよの導きに従つて
歩んできたまは御使いも遣わしてお前に伴な
わせ旅の目的をかなへてくださるお前はわたし
の親族父の家から息子のために嫁を連れて
来らうに命が下つた」とその時初めてお前はわたし

に對する誓いを解かれるはまだよいわたしの
親殺のところにいらつても娘をもらえな場合
にはお前は今の誓いを解かれると言ひました
かういふわけでわたしは今日泉の傍にやうて来
て祈つておりました主人アブラハムの神さまよわたし
がたゞ子でまたこの旅の目的をもしあなたの本意に
かなえてくださるおつもりならわたしは今御覧
のように泉の傍に立ちますからどうかおとめ

が水とくみにやして来るまじにならうといふが、
彼女にあなたの水がめの水を少し飲ませてください
と頼んでみます。どうぞお飲みください。さうしたら
水とくんであげよう。と彼女が答へた。さうしたら
その娘は、まがの主人の御心のためにお決めにあなた
方であるといひたします。『また、あなたがまだこの言ひ終
わらぬといふうちに、さかさまが水がめを肩に載せて
来られたではあつた。せんが、さうして泉に下りて行く』

腕に着けさせてあげたのです。わたしはひげを剃らなくて
まを伏し拝み主人アザラシ公の神まをほめたたえ喜び
まは主人の意思のためにはかならずお主人の一族の
お嬢さまを迎えることができたようにわたしの旅路を
まをとももって送ってくれたからあなたもか
今わたしは主人に敬意を込めてお礼を言いたいです
お子もつなはらばさうおつなはらしてあげたいからさうぞなれば
さうとびつちやうてくたからさうにさうてわたしは遠退き
決めたことなっています

「バンとトエルは父おまた」「ハのことはおの御意に志で
すからわたしどもが善い事申すまいとはござりますん
りべかはこのにおります どうぞお連れくださいですが
お決めたなうたとおりの御主人の御子息の妻になら
てくださる。アデラムの僕はこの言葉も聞くと地に
伏しおまを拝した。そして金銀の装身具や衣裝
も取り去りてりべかに贈りその兄と母にも高價な
品物を贈った。僕と使者たちは酒食のもてな
を受けそこの泊った

次の朝暈が起きたとき僕が「主人のとうろくへ帰らせて
ください」と言おうと……うぶかの兄と母は「娘をもうしよ
十日ほどあた——たちの手もとに置いてそこから行かせ
よう」と言ふ」と頼んだ——か！僕は言った

「あた——とお引き止めにならなうでください。この旅の目的

をかなえてください。……なのは、すなごです。からあた——を帰

らせてください。……主人のとうろくへ参りませ。……娘を

呼んでその口から聞いてみませ。……彼らは言

リベカを呼んで「お前はこの人と一諸に行きませうか」と尋ねた。
「はい、参ります」と彼女は答えた。彼らは妹ごあま
りぶかとその乳母アデラムの僕とその従者たちを一諸に
出立させようことにし、リベカを祝福した。言つたおたしの
妹よ、あなたの子孫が幾千万の民とならうよ。」

リベカは侍女たちと共に立ちあがり、らくだに乗り

その人の後に従った。僕はリベカを連れて行った。

イサアはネゲブ地方に住んでいた。そのまぶたは

から帰ったところであつた。又分暗くなつて
野原を散策していた目も上げて眺めると、
やがて来るのが見えたり、リズカも目も上げて眺め

イサヲを見たり、リズカはうぐぐながら下り、野原を歩いて

わたしたちも迎えに来るおの方は誰ですか」と僕
に尋ねた。あの方がわたしの主人です」と僕が答え
ると、リズカはベルを取らして、僕に僕は自分が
成し遂げたことをすべてイサヲに報告した。

イサウは母サラの天幕に彼女を案内した
彼はハリヅカを迎えて妻としたイサウはハリヅカを愛して
さくなられた母に代わち慰めを得た

第二十五章 ケトラーによるアブラハムの子孫

アブラハムは再び妻をとめてきた。その名はケトラーと

いつた⁽²⁾。彼女はアブラハムとの間にジムラシ・ヨラシヤン・ミン

ミテクアン・イシユバク・シユアを産んだ⁽³⁾。ヨラシヤンには

シユバとデガンが生かされた。デガンの子孫はアミエル人

シトシム人、シウシム人であった⁽⁴⁾。ミテクアンの子孫は

エラ・エフェルハク、アビク、エルガアであった。これらは

皆ケトラーの子孫であった⁽⁵⁾。アブラハムは全財産をも

イサクに譲った。側女の子孫たちには贈り物も
ほへえ自命が生き延びている間に東の方ケテム地方へ
移すはせせ自心子イサクから遠ざけた

アブラハムの死と埋葬

アブラハムの生涯は百七十五歳であつた。アブラハムは
長寿をも金うして自心を引き取り満ち足りて死に

先祖の列に加えられた。自心子イサクとイシマエルは
アラベラの洞穴に彼を葬じた。その洞穴はマムシの

前のヘト人のツネハルの子エラコンの畑の中にあつたが
その畑はアブラハムがヘトの人々から買ひ取つたもの
であつた。そこにアブラハムはサラと共に葬られた。

アブラハムが死んだ後神は息子イサクを祝福
された。イサクはベエル・ライ・ライの近くに住んだ。

イシマエルの子孫

サラの女奴隷であつたエジプト人がガルがアブラハム
との間に産んだ息子イシマエルの系図は次のとおり

である。

イニマエルの息子たちの名前は生かれた順に峯
げれば長男がネバヨト次はケダルアトベエルミブサム
ニニマ
よマサハダトデマエドルナマシケデマである

以上がイニマエルの息子たちで村落や宿営地は
従って名付けられた名前前である彼らはそれぞれ
部族の十二人の首長であった

イニマエルの生涯は百三十七年であった彼は息を
引き取り死んで先祖の列に加えられた。イニマエルの

子孫はエジプトに近いシエラに接した谷からアミエルに接した谷からアミエル方面に向かう道筋に沿って宿営し互いに敵対して生活していた

エサウとヤコブの誕生

アブラハムの息子イサウの系図は次のとおりである

アブラハムにはイサウが生まれた。イサウはリベカと結婚

したとき四十歳であった。リベカはパダナン・アラムの

アラム人ベトエルの娘でアラム人ラバンの妹であった

イザラは妻に子供ができてきなかつたので妻のため
また祈つたその祈りはまに聞き入れられ妻もカ
は身ごもつたところか胎内の子供が押し合
のぞりかはくれではわたりはどようなるのぞり
と言つてまの御心を尋ねられたために出かけた

まは彼女に言われたこの国民があなたの胎内
に宿つておりこの民があなたの腹の中で合
争つているこの民が他の民より強くなり兄が弟に

はえらようになり

月が満ちて出産の時が来ると胎内にはまよひなく
双子がいた。先に出て来た子は赤く、全身が毛皮
の衣のようであつたのでエサウと名付けた。その後で
弟が出て来たがその子は白がエサウのかかと(マゲブ)を
つかんでいたのでヤコブと名付けた。リズカが二人を産
んだときイサクは六十歳であつた。

長子の特権

二人の子供は成長してエサウ巧みな狩人で

野の人となつたがヤコブは穏やかな人で天幕
の囲子で働くのを常としていた。イサクはエサウを
愛した狩りの獲物が好物だったが、
しかしリズカはヤコブを愛した。ある日のこと
ヤコブが煮物をよそっているとエサウが疲れ切つて

野原から帰つて来た。エサウはヤコブに言った
「お願いだ。その赤いもの(アダム)や、その赤いものを

食べたい。わたしは疲れきつてしまった。」

彼の名をエドムとも呼ばれたのはこのためである
ヤコブは言った「まゝお見さんの権利を譲って
ください。ああ死にそうだが長子の権利など」

どうでもよいと答へるとヤコブは言った

では今すぐ誓ってください。エサウは誓い、長子の

権利をヤコブに譲った。ヤコブはエサウに

パンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食い

したあげく立ち去って行つた。こうしてエサウは

長子の権利を軽んじた

第二十六章 イサウのゲラルル滞在

アブラハムの時代にあつた飢饉とは別にこの地方
にまた飢饉があつたのでイサウはゲラルルにいる
プリーテ人の王アビメレウのところへ行つた②その時
まがイサウに現われて言われた「エジプトへ下つて

行つてはならぬ」わたしが命じる土地に滞在

しなさい③あなたがこの土地に寄留するならば

わたしはあなたと共にいてあなたを祝福しこれら

の土地をもすべてあなたの子孫に与えあなたの
父アブラムに誓ったわたしの誓いも成就する

わたしはあなたの子孫を天の星のように増し
これらの土地をもすべてあなたの子孫に与える

地上の諸国民はすべてあなたの子孫によりて祝福
を得る アブラムがわたしの声に聞き従いわたし

の戒めや命令を授けや教えを守りたからである

そこでイサウはゲラルに住んだ。その土地の人たちが

イサウの妻のいふことを尋ねたとき彼は自分の妻だと
言うのを恐れ、「わたしの妹です」と答えたリカ
が美しかったので土地の者たちがリカのゆえに自分をも
殺すのではないかと思つたがうでである。イサウは長
く滞在していたがあるとき、プリンチ人の王アビメシスが
宮から下を眺めるとイサウの妻リカが戯れていた
アビメシスは早速イサウを呼びつけて言った、あの女は本まは
あなただの妻ではないかそれなのになぜわたしの妹です

なごし言ひたつたのか、彼女のゆえにわたしは死ぬこと
にならねばならぬと思つたからです」とイサクは答へる
と、アビメウクは言つた、あなたは何であらう、いとをいふた
民のたれかがあつたの妻と寝たか、あなたは我々を罪
に陥れるといふのであつたか、アビメウクは言つた、民に
命令を下した、この人、あなたはその妻に危害を
加ふる者は必ず死刑に処せられる、イサクがその
土地に穀物の種を蒔くと、その年のうちに百倍もの

收穫があつたイサウが主の祝福を受け、豊かに
なりまします。富み榮えて、多くの羊や牛の
群れ、それに多くの器、使ひを持つようになよ。と、
人はイサウをおたむようになつた。

井戸をめぐる争い

ヘロニテ人は昔イサウの父アブラムが僕たちに掘ら
せた井戸をいざいざとくふやぎい土で埋めた。アビメレフは

イサウに言つた。あなたは我々を比べてあまりに強くなつた

どうか、ここから出て行つて、ただきたい。イサクはそなた
を、このゲラルの谷に天幕を張つて住んだ。そなたも
又アブラハムの時代に掘つた井戸が、幾つかあつたが、アブラハムの
死後、そのミテ人（ミテ人）がそれらをもふさいでしまつて、いた。イサクは
それらの井戸を掘り直し、父が付けたとおりの名前を付け
イサクの僕たちが、谷で井戸を掘り、水が豊かに湧き出る
井戸を見つけた。ゲラルの羊飼いたちは、この水は
我々のものだ」と、イサクの羊飼いと争つた。そこで、イサクは

その井戸も「Hank」(ハンク)と名付けた彼らがイサウと
争ったからで「あゝ、イサウの僕がたちがせう」の
井戸も握り當りとしてそれについてもう争いがあつた
それでイサウはその井戸を「トナリ」(敵ま)と名付けた
イサウはそこから移つて畑にもう一つの井戸を握り
當つたそれについては「あゝ争いは起こらなかつた
イサウはその井戸を「ホボト」(広い場所)と名付け、今や
まは我々の繁栄のため「広い場所」をおとすえになつ
と言つた。

アビメウが、オウラの軍の了らんと軍隊の長はピルと共に
ゲラルからイサウの所に来た。イサウは彼らに尋ねた

「あなたたちはわたしを憎んで追いかけたのになぜ

ここに来たのですか」彼らは答えたが、あなたが
昔におられることがよく分るからです。そこで

考えたのです。我々はお互いにつまり我々とあなた

がたの間で契約を交わしあなたと契約を結び

たいです。以前我々はあなたに何も危害を加えず

まゝろあなたのためにならうもう討りあなたを無事に送らせましたそのようにあなたたち我々にいかなる害も与えなご下さいあなたには確かに主に祝福された方です。そしてイサウは彼らのために祝宴を催し共に飲み食ひした。次の朝早く互いに誓いを交わした。後イサウは彼らを送らせし彼らは安らかに去つて行った。その日に井戸を掘つた。たゞイサウの僕たちが帰つて来て

父が来た」と報告した。その子イサウはその
井戸をニブア(誓い)と名付けた。そこでその町の名は
今日に至るまで「ベエル・ニブ」(誓いの井戸)とよばれる。

エサウの妻

エサウは四十歳のときト人ブエラの娘リサトとト人
エラの娘ベサトを妻として迎えた。彼女たちは
イサクとリベカいとして極みの種となった。

第二十七章 早リベカの計略

イサラは年をととり目がかすんで見えなくなつて
きたそこでその息子のエサラを呼び寄せ
「息子よ」と言ったエサラがはいしと答へると
「エサラは言ったこんな年をとつたのでわたし
はいつ死ぬが分からぬ」③今すぐにもろと矢筒など
狩りの道具を持って野に行き獲物を取つて
来てほしい死ぬ前にそれを食べてわたし自身

祝福とお前に与えたこと。リベカはエサウが息子のエサウに話しているのを聞いていた。エサウが獲物を取りに野にいくと、リベカは息子のヤコブに言った。今お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを耳にしました。獲物を取って来て、あのおいしい料理を作ってほしい。わたしは死ぬ前にそれをも食べて、主の御前でお前を祝福したと。わたしの子よ、今わたしが

言はるゝとさういふ聞にこそそのとおりのバーバに
家畜の群れのついでに行つてよく肥えた子と
も二匹取つて来たからそれがお父さんの好きな
おいし料理も作りまから。それをあなた
のバーバ持つて行きたさ。お父さんはバーバ
がさういふ前にお前を祝福してくださった
デービーがバーバは母リバーバに言つた
エソウ兄さんはとても深いのにあたる肌は

清らな一歩。お父さんがあたしに触れただけ
して、いっしょに命をまますらうたらあなは
祝福どころか反対に呪いも受けまらぬよ。」
母は言ふた。あたしの子よ。そのときはお母さん
がその呪いも受けました。ただあたしの言う
とおりに取って来なさい。ヤコブは取りに行き
母のところに持つて来たので母は父の好きな
おいし料理を作った。リベカは家にありておいた

さあどうぞ起きて座つてわたしの獲物を召しよ
お父さん自身の祝福とわたりに与えてください
「わたりの祝福をどうぞ」とまたいふので「お父さん
の」とイサックが懇めに祈らるゝヤリブは答へた「あなた
の神もわたりのために祈つてくたさうなういふ
イサックはヤリブに言つた「近寄りなから」わたりに
触つて本堂にお前かどうか確かめた」「ヤリブが父
イサックに近寄りなからイサックは彼に触りながら言つた

「声はヤミラの声だが腕はエサウの腕だ」……イサウは
ヤミラの腕が兄のエサウの腕のやうに毛深くなうて
いたので見破るゝことができた。そこで彼は
祝福しようとして「言うた。お前は本意にわたりの
子エサウなのだ。」ヤミラは「もちろんです」と答えた。
イサウは言った。ではお前の獲物をここに持つて

来なさい。それを食べてわたしの自身の祝福を
お前に与えよう。ヤミラが料理を差し出すとイサウは

食ぶぶどう酒をもぐとそれを呑んだ。それから
父ヤフは彼に言った。わたーの子よ近寄りつて
わたーにロブけをいだけ。ヤムブが近寄りつてロブけ
をいすとイサフはヤムブの着物の白もかいて祝福と言った。
「ああわたーの子の香りはまが祝福した野の香りの
どうか神が天の露と地の産物をおす豊かきもの
穀物とぶどう酒をお前に与えてくれた。さうして
多くの民がお前に仕え多くの国民がお前にひれ伏す

お前を呪うものは呪われお前を祝福する者は
祝福されようべし

悔しがらエサウ

イサクがヤコブを祝福し終えてヤコブが父イサクの
前から立ち去るとすぐ兄エサウが狩りから帰って来た
後もおいしい料理を作り父のところへ持って来た

「わたーのお父さん起きて息子の獲物を食ってください」

「そしてあなた自身の祝福をわたーに与えてください」

又イサウがお前には誰なのかと聞くとわたしです

あなたが息子と長男のイサウです」と父が返ってきた

イサウは激しく体を震わせました。ではあれは

一体誰だつたのださうき獲物を取つてわたしの所に

持つて来たのだ。お前は実はお前が来る前にわたし

はみんな食べて彼を祝福してやったのだから彼が

祝福されたものにならている。イサウは父の

言葉も聞くと悲痛な叫びをあげて泣き文に向

言つた

「わたしのお父さんわたしもこのわたしの祝福

して下さい」「エサウは言った「お前の弟が来り策略

を使ってお前の祝福を奪ってしまった」「エサウは叫んだ

「彼もヤコブとはよく名付けだものだ」「二度も

わたしの足を引、強く「ヤコブ」欺いたあの時は長子の

権利を奪い、今度はわたしーの長子の権利を奪う

「お父さん」エサウは続けて言った「お父さんはわたしの

ために祝福も残しておいてくれなかつたのです。」

エサウはエサウに答えた。既にわたしは彼もお前の
主人とし親族をすべて彼の僕とし穀物もぶどう酒の
彼のものにしてしまつた。わたしの子よ、今とならば
お前のために何をしてやれようか。エサウは父に叫んだ。
「わたしのお父さん、祝福はたつた。つかかならぬです。
わたしもこのわたしも祝福してください。わたしのお父さん
エサウは毒をあけてほいた。父エサウは言った。

「ああ、地のまじみせず、豊かなものから遠く離れた所

この後お前はそこに住む天の露からも遠く隔てられてお前は剣に執つて生きていくか。お前は弟に恨みがある。いつの日かお前は反抗を企て自分の首から鞭を落とす。

逃亡の勧め

エサウは父がヤコブを祝福したことを根に持つて

ヤコブを増せようになつた。そこで心の中で言った

父の誓ひの日を待たないで。そのときが来たなら必ず若

殺しやうと云ふ所の言はるる業が
母りぶかの耳に入つた彼女は人をやうて其の息子
ヤコブを呼び寄せし言つた大變ですエサウ兄さんが
お前を殺して恨みも晴らそりといひます。わたしの
子よ今わたしよ言らうことをよく聞き急ぎやうに
わたしの兄ラビンの所に逃げて行きなさいと云へてお兄さんの
怒りが治まらうと云へばとく伯父さんの所に歸つてもよい
なす。そのうちにお兄さんの情らも治まらうお前のこと

わが家へいそふだんからかゝりては入をまいておぼや
呼んで居ますよ一日のうちにあなたを二人を失うことな
らうと

ヤロブの出発

リカはイサクに言つた「わたしはト人の娘たちの

いどで暮かしてゐるのが嫌になつたからヤロブまで

もこの土地の娘の中からあなたト人の娘をよこした

わたしはまゐつていそふだんからかゝりては入をまいておぼや

第二十八章

イサクはヤコブを呼び寄せて祝福して命じた。お前はカナン(3)の娘の中から妻を迎えてはいけぬ。ここをたつてパタン・アラムのゾエールおじいさんの家に行きそこでレバン伯父さんの娘の中から結婚相手を見つけてなさい。(4)どうか全能の神がお前も祝福と繁栄させお前を増やして多くの民の群れとしてくださるようになさい。どうかアブラハムの祝福がお前とその子孫に及ぶ。

神がアブラハムに与えられた土地お前が因り習うてらる
この土地も受け継ぐ事が出来よう」とヤリブは
イサクに送りつけられてバラム・アラムのシバンの所へ来た
シバンのアラム人ハエルの家へ行ってヤリブとハエルの中へ
シバンの
兄であった

エサウの別の妻

エサウはイサクがヤリブを祝福してバラム・アラムへ送り出し
そこから妻を迎えさせたことからも彼を祝福

「たまたまカサの娘の中から妻を迎えてはいただけないと
命じられた。そのマラブが父と母の命に命に従ってバ
ラムへ旅立ったことなども知った。エサウはカサの
娘たちが父イサウの氣に入らぬことを知って、イシマ
の次へいき既にいる妻のほかからカサの妻の面影を
イシマの娘でネバヨトの妹にあたるカサの妻と見た

マラブの夢

マラブはベエル・シバを去りてバラムへ向かふた。その場には

来たとき目が洗んだのでそこで夜を過すことした
まははその場所にあつた石を一つ取って枕にして
その場所に横たわつた。すると彼は夢も見
先端が天をきく階段が地に向つて伸びて
おりしかも神の御使いたちがそれを上つたり
下つたりしていた。見よまが傍らに立ち上つた
わたしはあなたの父祖アブラハムの神イサアの神
まである。あなたが今横たわつていらるこの土地を

あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫
は大地の砂粒のよみに多くなろう。西へ東へ北へ南へ
と広がっていくであろう。地上の氏族はすべてあなた
とあなたの子孫によつて祝福きに入る。見よ。

わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行くつても
わたしはあなたを守り必ずこの土地に連れ帰ら
わたしはあなたに約束したことを果すまで

決して見捨てない。ヤコブは眠りから覚め言った

「ふいよとにまがおられたるのにわたーは知らなかつた
そして恐れおののいて言つた「いんはなんと畏れ
多い場所だらうこれはまさしく神の家である
予がだんこは天の門だ」ヤコブは次の朝早く起きると
杖にさした石を取りそれを記念碑としてまア
先端に油を注いで、その場所とベテル(神の家)と
名付けたちなみにその町の名はかつてルズと譯された
ヤコブはまた誓願を立て、言つた「神がわたーと共に
おられ

わたしが歩むこの旅路を守り食べ物着る物も
与えさせ事に父の家に戻らせてください
主がわたしの神となられるならわたしが記念碑
として立てたこの石を神の家として建ててあなたが
わたしに与えられるものの十分の一をささげます

第二十九章 ラバンの家に着く

ヤコブは旅を続けて東方の人々の土地へ行った
ふと見ると野原に井戸がありそのそばに
羊が三つの群れになつて伏していたその井戸から
羊の群れに水を飲ませることになつていたが
あちところが井戸の口の上には大きな石が載せて
あつた。まず羊の群れに水を飲ませまた
石を元の所に戻しておくことになつていた

ヤコブはさういふ人たちに尋ねた。比呂さんは

どちらの方でございましょうか。わたしはハウリンの者でござい

と答えたので、ヤコブは尋ねた。ではオホルの息子

ラバンも知っていますか。「ええ、知っています」と彼らが

答えたので、ヤコブは更に尋ねた。「元気でよろうか」

「元気でいます。もうすぐ娘のラケルも羊の群れを連れて

やって来ます」と彼らは答えた。ヤコブは言った

「まだ、なんでもおぼろげに、家来を遣はす時でも

ない羊に水を飲ませてもう一度羊をも食べ
させに行つたらどうですか」「すると彼らは答えた
「それは出来ないので羊の群れも全部ここに
集めあの石を井戸の口から転がして羊に水を飲
ませるのですが」「ヤコブが彼らと話し合つてうちに
ラケルが父の羊の群れを連れてやつて来た彼女
も羊をも飼つていたのである。ヤコブは伯父エビの
娘ラケルと伯父ラビンの羊の群れを見るときに

井戸の口に近寄り石を転がして伯父ラバンの羊に
水を飲ませた。ヤコブはラケルに口づけし昔を
あげて泣いた。ヤコブはヤガアラケルに自分が彼女
の甥にきたりウレバカの息子子であることを打ち明けた。
ラケルは走って父に知らせた。ラバンは妹の息子
ヤコブの事を知ると走って迎えに行きヤコブを抱き
締め口づけをした。それからヤコブを家に案内した。
ヤコブがラバンの事の次第をすべて話すと、ラバンは彼に
言った、「お前は本當にわたしの骨肉の者だ。」

ヤコブの結婚

ヤコブがラバンののもとにひと月ほど滞在したある日
ラバンはヤコブに言ったお前は身内の者だからと
言つてただで働くことはなうとどんな報酬が欲しい
か言ふやみなさいとところろでラバンには二人の娘が
あり姉の方はレア妹の方はラケルといつたレアは
優しい目をしてゐたがラケルは顔も美しく容姿女も
優れていたヤコブはラケルを愛してゐたので下の娘

ラケルをくいだせるならわたしは七年間あなたの
所で働きおす」と言った。ラバンは答えた、あの
娘をほかの人に嫁がせよう。お前に嫁がせようが良
いわたしは祈らない。ヤコブはラケルのために七年
間働いたが彼女を愛していたのでそれはほんの数日
のうちに思われた。ヤコブはラバンに言った。約束の
金貨が昔ちまうたからわたしはいいなすけと一緒に
ならやっていたから。ラバンは土地の人たちを皆集めて

祝宴を開き、夜にならんと娘のリアをヤコブのせいに連れて行つた。そこでヤコブは彼女のところに入った。リアはまた女奴隷ジルバを娘リアの部屋に使ひとして付けてやった。ところが朝になつてみるとそれはリアであった。ヤコブがリアにどうしてこんなことをしたのか、あたしはあなたのもつとで働いたのは、ほんのためではありませんか、なぜわたしをだましたのですか、と言ふと、リアは答へた、「我々の所では妹を姉と

祝宴を開き、夜にならんと娘のリアをヤコブのせいに連れて行つた。そこでヤコブは彼女のところに入った。リアはまた女奴隷ジルバを娘リアの部屋に使ひとして付けてやった。ところが朝になつてみるとそれはリアであった。ヤコブがリアにどうしてこんなことをしたのか、あたしがあなたのもつとで働いたのは、ほんのためではありませんか、なぜわたしをだましたのです」と言ふと、リアは答へた、「我々の所では妹を姉と

先に嫁がせらふとはしなこのだといふ、ハバの週同
の婚礼の祝いも清まらせなさい、そうすれば妹の方
もお前に嫁がせようだが、もう七年間うそで働
いてもらわねばならぬい、ヤコブが言われたとおり
一週同の婚礼の祝いも清まらせ、ラバンは下の娘
ラケルもヤコブに妻として与えた、ラバンはまた
女奴隷ビルハを娘ラケルに召し使ひとして付け、
やつた、ラケルはヤコブはラケルをめでつた、ヤコブは

シアはもうもラゲルを愛した。そして更にもう七年。シン
のもとで働いた。

ヤコブの子供

まはシアが疎んじられていたのを見、見、彼女の
胎を痛がれたがラゲルには子供が生まれて来た。

シアは身ごもって男の子を産み、シンと名づけた。
それは彼女が「まは」の苦しみを顧みず（シア）
くださった。これからは夫もあなたを愛してくれ
るにちがいない」と言ったからである。

シアははまた身ごもつて男の子をおよぼすはわたしが
疎んじられてゐることを耳にひかれ(イヤ)はまたの
子をも授けたくばつた」と言つてシメオと
名付けた。シアはまた身ごもつて男の子を
産み、これがからはきつと夫はわたりに結び付
てゐてくれるだろう。夫のため三人も男の子
も産んだのだから」と言つた。そぞろそぞろ子をおよ
ぼす名付けた。シアはまた身ごもつて男の子を

信女、今度ハ一々もほめたたえ(カギ)ようとした
そとでその子もずと名付けたし、ばく後女は
子を養育した。

第三十章

ラケルはヤコブとの間に子供ができたことが
分かる。姉をねたむようになりヤコブに向そ
うわたりにもせむ子供を尋ねてくれたはいと尋ねて
くださらなければわたりは死にます」と言った
ヤコブは激しく怒りつて言ったわたりが神に代
われると言おうのかお前の胎に子供を宿らうせ
ないのは神御自身なのだ。ラケルは、わたしの

召使いのビルハがいます。彼女のところにいって、
彼女が子供を産み、わたしがその子も膝の上には
ええ。彼女によつて、わたしも子供を持つことが
できちます」と言つた。ラケルはヤコブに「召使
ビルハを側女として与えたので、ヤコブは彼女のところ
に入った。ヤコブは身ごもつて、ヤコブとの間
に男の子を産んだ。そのときラケルは「わたし
の訴えも、神は正しくお裁き(さだ)めになさう。わたしの

願いを聞き入れ男の子をよそへてくれた。』
と言つた。そこで彼女はその子をダビと名付けた。
ラケルのカミール使ひビルハはまた身ごもつてヤコブとの
間に二人目の男の子を産んだ。そのときラケルは
姉と死に物狂ひの争ひをしてラケルに勝つた。
と言つた。だがその名をちつたりと名付けた。シヤも
自分に子供がでまなくなつたのを知ると自分の
名使ひビルハをヤコブに側女としてよそへたので

ラケルがシアに「あなたの子供が取って来た
恋なすびをわたしにわけてください」と言
シアは言つた「あなたはわたしの夫を取っただけ
では気が済ませません」の息子の恋なすび
まで取ろうとするので「それではあなたの
子供の恋なすびの代わりに今夜あなたの
あなたと床を共にするようしなすび」と

ラケルは答えた「又方になりヤコブが野原から

帰らうて来るとシアは出迎えて言った「あなた
はわたしのところへ来たわけにはなうません
わたしは息子の子を産むまであなたを産んだ
のでしたら「その夜ヤコブはシアと寝た」神が
シアの願いを聞き入れられたのでシアは身ごもって
ヤコブとの間に五人目の男の子を産んだ
そのときシアは「わたしを召し使いを夫に与えた
ので神はその報酬（ヨカル）をくれた」と言つて

その子をイサカルと名付けた。シアはまた身ぶ
もうアヤコブとの間に六人目の男の子を産んだ。
そのときシアは「神がすばらしい贈り物をあたへて
くださった。今度はこそ夫はあたへて道を教へてく
る。」と喜んで、しょう夫のためにも六人も男の子を産
んだのだが、「ら」と言つてその子をセブルンと名付けた。
その後シアは女の子を産み、その子をデナナと名付けた。
シカール神はラケルも御心に留め、彼女の願いを聞き入れ

その胎を削がれたので、ラケルは身ごもつて男の子を
産んだ。そのときラケルは神がわたしの恥をすすんで
くださった」と言った。彼女はまががわたしのにもう
一人男の子を加えてくださった。あすように、(ヨセフ)と願そ
うたので、ヨセフと名付けた。

ラバンのとの駆け引き

ラケルが、(ヨセフ)を産んだ。ところが、(ラケル)はラバンに言った。
「わたしを独り立ちさせて生まれ故郷へ帰らせて

くだせう。あなたは今まで妻を知らないうちにあなた
のダブルで働いて来たのだから妻の世に帰ら
なければならぬあなたのためにあなたに帰ることに
して貰うか。お前さんのことはお前さん
良ければもつてほしいのだが実はお前さん
はお前のお陰で主から祝福をいただいていることが
今からだが。ダブルは言え。更に続けてお前
望む報酬をはつきり言いたくないはず支拂いから

とまった。カレッジは言った、あなたから入るならあなた
のためには、新しい家の建設を一時ストップするな
いのはすぐです。わたくしが来るまでにはあきらめた
家賃が今では、そんなに多くなっています。あなた
が来るからは、私があなたを祝福しておられます。
カー、今の仕事は、いい仕事だ。あなたは自分の
家を持つことが、とてもいいことだ。何を、お前
に支払え、その「カレッジ」の建設を、あなた

は答えた。何もくたさしには及びません
ただこうゆう条件ならもう一度あなたの
群れを飼世話をいたさしよう。今日あなた
はあなたの群れと全部見回つてその中から
ぶちとまらばらの羊をよぶと羊の中ぞ黒い
かかたむのすくしてそれからまだらとぶちの羊
を取り出しておきますからそれをわたしの
報酬にしてください。明日あなたが来てわた

報酬をよく調べればわたしの正しきことは
証明されよう。山羊の中にぶちとまだら
でなぐものや羊の中に黒みがかったものか
あったらわたしが盗んだものと見なす。結構
です。ラバンは言ふたよう。い、お前の言うとお
りにしよう。」「と、ろがその日ラバンは縮やまた
の雌山羊全部つまり白と黒が混じっている
もの全部とそれに黒みがかった羊をみなとり

出——自分の肩、ゆだちの手に渡——ヤコブが
ラバンの残りの群れをも飼つてゐる間に自分と
ヤコブとの間に歩いて三日の距離をまた
ヤコブの工夫

ヤコブはポプラとアーモンドとプラタナスの木の新枝を
取り来て皮をはぎ枝に白い木肌の縞を作り
家畜の群れがやつて来たとき、群れの目に
つくように皮をはいた枝を家畜の水飲み場の

水櫃の中に入れた。そして家畜の群が水と
飲みにやつて来たとき、さかづくようになつた
ので、家畜の群はその枝の前で交尾して、縮
やぶちやまじららのものも産んだ。またヤコブは
羊を二手に分けて、一方の群をラバンの群れの
中の縞のものも全体が黒みがかつたものと同じ色に
せた。彼は自分の群れだけには、さうしたが、
ラバンの群れには、さうしなかつた。また丈夫な

草が交尾する時期になるとヤギは皮を
はいた枝をいつも水ぶねの中に入れて群れの
前に置き枝のそばで交尾させたが、弱い草の
ときは枝を置かなくなった。弱いのはヤギ
ものとなり、丈夫なのはヤギのものとなりた。
こうしてヤギはますます豊かになり、多くの
家畜や男女の奴隷、それにらくだやろばなど
を持つようになりた。